教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 看護学科　　資格： 教授　　氏名： 布谷　麻耶

研究分野	研究内容のキーワード
慢性期看護，難病看護	炎症性腸疾患，セルフマネジメント，意思決定，QOL，大腸内視鏡検査
学位	最終学歴
博士（看護学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.薬害被害者の生の声を聴く授業の導入	2022年11月～現在	武庫川女子大学看護学部の教授として担当の1年次開講「成人看護学概論」において、授業の到達目標の一つである、「成人期にある人々を支援する看護活動および看護師の役割について説明できる」に関して、成人期にある薬害被害者の方の生の声を聴き、患者の擁護者としての看護師の役割や患者の尊厳を守る看護実践について考えを深める授業を実施している。授業後の学生のレポートから、薬害被害の実態や対象者の生活への影響について学ぶとともに、患者擁護や看護師としての倫理観の形成につながっている。
2.博士後期課程院生への主指導・副指導	2019年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科博士後期課程に在籍する院生の主指導教官として、研究テーマの明確化から論文作成、発表までの一連の研究プロセスについて指導を行っている。また、副指導教官として、研究計画書立案や論文の作成等にかかわり、指導を行っている。これまでに主・副指導を担当した院生の博士論文題目は「診断後間もない成人期クローン病患者のセルフケアを構築する看護アセスメントツールの開発」「地域在住高齢者における人生の最終段階の医療に関する家族との話し合いのプロセスと看護支援」等である。
3.患者体験を重視した演習の実施	2017年4月～現在	武庫川女子大学看護学部で担当の「成人看護学Ⅱ（慢性期）」（専門科目、3年次配当）において、慢性疾患患者が病気と共に生きる生活への理解を促すため、血糖自己測定・インスリン自己注射、汁物の塩分チェック、自己検脈、鼻カニューレの長時間装着等の患者体験を踏ま、レポートの提出を求めた。学生からは、「実際に自分で体験して、患者の大変さや負担がわかった」等の意見や感想が得られた。
4.慢性期看護に関わる理論についてのディスカッション	2015年9月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科で担当の「生涯発達看護学特論A（成人慢性看護学）」において、修士課程に在籍する院生を対象に、慢性疾患を有する患者の療養行動を理解するための理論として、セルフケア、セルフマネジメント、行動分析理論を中心に、まずその概要を説明し、実際にこれらの理論に基づく実践を臨床の場で行うにあたっての適用可能性や予想される効果、限界や課題について、ディスカッションを行っている。
5.修士課程学生への主指導・副指導	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科修士課程に在籍する院生の主指導教官として、研究テーマの明確化、文献検討やクリティーク方法、研究計画立案について指導を行っている。また、副指導教官として、研究テーマの明確化から研究計画書立案、データの分析、論文の作成と発表に至るまでの一連の研究プロセスにかかわり、指導を行った。これまでに主・副指導を担当した院生の修士論文題目は「慢性創傷患者の疼痛評価－創傷処置時の疼痛に焦点を当てて－」、「小児科外来に通院する20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に向けた準備状況」、「腎移植レシピエントの退院後の感染に影響する自己管理行動と嚥下障害のリスクに関す

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		る実態調査」、「外来通院する潰瘍性大腸炎患者におけるQuality of life関連要因の探索とモデル構築」等である。
6.慢性疾患患者への看護を考えるうえでの漫画事例の活用	2014年9月～2016年2月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学実践論Ⅱ(セルフケアを支える看護）」（専門科目、2年次配当）において、慢性疾患患者と家族への看護について病みの軌跡理論に基づいて考えるうえで、潰瘍性大腸炎と診断された主人公が病いと向き合うプロセスが描かれた漫画を事例として活用し、授業を行った。授業後の学生からのリアクション・ペーパーからは、「文章ではなく漫画による事例だったので実際の患者の状況や心情がわかりやすかった」等の高い評価が得られた。
7.グループ学習の実践	2012年12月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学概論Ⅱ」（専門科目、1年次配当）において、慢性期の看護を考えるための中範囲理論として セルフケアとセルフマネジメントの概念を紹介した。その後で、学生を5,6名のグループに分け、潰瘍性大腸炎患者の事例を提示し、患者のセルフケア能力のアセスメント、さらに必要な看護援助についての検討をグループごとに行うように促した。まとめの発表では、各グループで検討したことが報告され、学生全体で学びを共有することができた。
8.E-learningを活用した事前学習課題の提示	2012年10月～2016年2月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「実践基礎論Ⅱ(生きていくしくみを支える看護方法）」（専門科目、1年次配当）において、学生の事前学習を促すために、各回の授業の1週間前に課題をE-learning上にアップし、各自で次回の授業までに取り組むように促した。授業では、事前課題の実施状況を確認するとともに、その内容について解説を行った。授業後は課題を回収し、評価後、各学生へ返却した。授業評価に関する学生アンケートでは、予習や講義資料の項目で高い評価が得られた。
9.演習における振り返りシートの活用	2012年10月～2016年2月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「実践基礎論Ⅱ(生きていくしくみを支える看護方法）」（専門科目、1年次配当）において、学生の演習での学びを言語化し、今後の学習へつなげていけるように、振り返りシートを作成し配布した。演習後、各自で看護師役と患者役、それぞれを実施して気づいた点や改善を要する点などをシートに記入させ、翌朝提出とした。振り返りシートは成績評価の対象とはしなかったが、毎回ほぼ全員の学生から提出があり、実際に体験してみて気づいた点、さらにそこからどのような配慮や援助が必要と考えたのかが、具体的に記述されていた。
10.デモンストレーションおよび体験学習の導入	2010年10月～2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）において、輸液施行中の術後患者の寝衣交換の演習を、はじめに教員によるデモンストレーションを行い、その後に、学生同士で患者役、看護師役に分かれて実施した。その結果、教員によるデモンストレーションなしで学生同士で演習を行っていた場合と比べ、看護師役の学生はスムーズに援助が実施でき、患者役の学生も実際に術後の患者がドレーンやルート等によりどれだけ身体の動きが制限されるのか、学ぶことができた。また、学生から「デモンストレーションを見てイメージがついた」等の意見が挙げられた。
11.看護技術習得のためのシュミレーションモデルの活用	2010年10月～2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次配当）、「看護学演習Ⅰ」（専門科目、3年次配当）において、

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		学生が実践に近いかたちで技術が習得できるように心肺蘇生人形や異物除去人形、吸引モデル等のモデルを活用した演習を行った。学生は、心肺蘇生や異物除去、気管吸引の技術を実際に人形を通して体験することで、自分ができた技術とできなかった、あるいは不十分であった技術が明確になり、今後の課題設定ができた。学生アンケートの結果からは「実践に近いかたちで学べた」等の高評価が得られた。
12.学生による自己評価と教員、病棟スタッフによる他者評価の活用	2009年10月～2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）において、術後患者に対するフィジカル・アセスメントと輸液施行中の患者への清拭・寝衣交換の実施にあたって、学生による自己評価表と教員または病棟スタッフによる他者評価表を作成し、学生へのフィードバックの際に活用した。一人の学生につき実習前・中・後で各1回ずつ、計3回評価を行った。その結果、他者評価を行う教員と病棟スタッフ間の指導に対する共通認識が深まり、学生側では自己の課題が明確になり、実習前後で学生の技術の向上がみられた。
13.フィジカル・アセスメント技術習得のための シミュレーションモデルの活用	2008年10月～2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）において、学生が術後の患者の状態をイメージし、適切な援助が行えるように、フィジカル・アセスメントモデルを用いた演習を臨地実習開始前に行った。創があり、ドレーンやルートの挿入された術後患者を想定した演習を行うことで、実際に術後の患者を受け持った際、学生のリアリティショックが少なく、バイタルサインの測定や水分出納の観察、アセスメント等がスムーズに行えた。
14.ディスカッションの導入	2008年5月～2010年8月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次配当）において、クリティカル看護の分野における専門性、教育的機能、マネジメント、継続看護について学ぶ目的で、日々テーマを決め学生同士でディスカッションする時間を設定した。ICU、手術室の外回り・器械出し看護の専門性、クリニカルラダーに沿った教育、人・物・時間・環境のマネジメント、手術室・ICU・病棟・外来間での継続看護の実際について学んだことをディスカッションすることで体験の意味付けにとどまらず、学生同士で学びを共有でき、臨床現場をみる視野が広がった。
15.学内演習における小人数教育の実践	2008年4月～2011年3月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次配当）、「成人看護技術論」（専門科目、3年次配当）、「看護学演習Ⅰ」（専門科目、3年次配当）、「看護学演習ⅡB」（専門科目、4年次配当）において実践した。学生2～5人のグループに教員が1人つき、脳神経や眼・耳・鼻、呼吸器、循環器、腹部のフィジカル・アセスメント、肝臓がんで腹水の溜まった患者を事例とした寝衣交換等の技術指導を行った。その結果、教員は学生一人一人の細かい手技まで確認でき、指導が行えた。学生は、気軽に教員に質問でき、フィジカル・アセスメント能力および援助技術が向上した。
2 作成した教科書、教材		
1.慢性疾患患者への看護過程の展開事例	2017年5月～現在	武庫川女子大学看護学部の准教授・教授として担当の「成人看護学実習（慢性期）」（専門科目、3年次配当）において、実際に慢性疾患患者を受け持ち、看護過程を展開するため、その展開例として2型糖尿病患者の事例を取り上げ、実習で用いる記録様式に患者の基礎情報、病態関連図、情報の整理、アセスメント、統

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
		合と問題の抽出、看護計画立案までの過程を示す資料を作成した。本資料は毎年、見直し改訂している。
2.慢性期看護演習資料の作成	2017年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の准教授・教授として担当の「成人看護学Ⅱ（慢性期）」（専門科目、3年次配当）において、慢性期にある患者を看護するにあたり必要な知識と技術を正確に理解し、患者の療養生活をイメージしながら個々の患者に必要な援助を考える力を養うために、授業で使用する資料を作成した。本資料は毎年、見直し改訂している。
3.成人看護学実習（慢性期）の実習要項および記録様式の作成	2017年3月～現在	武庫川女子大学看護学部の准教授・教授として担当の「成人看護学実習（慢性期）」（専門科目、3年次配当）において、学生が受け持ち患者の看護過程を展開するうえで使用する記録様式とその記載例を作成した。また、本実習が円滑に行えるように実習要項を作成した。本実習要項および記録様式は毎年、学生・担当教員からの意見をもとに改訂を重ねている。
4.健康教育の講義資料の作成	2015年10月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「健康支援方法論」（専門科目、4年次配当）において、健康教育プログラムの実際として、PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者の口腔保健行動の把握から口腔ケアプログラムの開発と評価について説明する資料を作成した。
5.慢性期看護学実習における記録様式および指導要領の作成	2014年3月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学実習Ⅲ(セルフケアを支える看護）」（専門科目、3年次配当）において、学生が受け持ち患者の看護過程を展開するうえで使用する記録様式とその記載例を作成した。また、本実習が円滑に行えるように担当教員および臨地実習指導者向けの実習指導要領を作成した。
6.慢性期看護の教材の作成	2013年3月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学実践論Ⅱ(セルフケアを支える看護）」（専門科目、2年次配当）において、慢性病をもつ人と家族への看護、肝機能障害を有する患者（主に肝硬変患者）の看護、排泄機能障害を有する患者（主に慢性腎不全患者）の看護、免疫機能障害を有する患者（主に関節リウマチ患者）の看護、認知・感覚・運動機能障害（主に脳血管障害患者）の看護、がん総論、肺がん患者への看護の授業で使用する資料を作成した。
7.手術室看護の演習用教材の作成	2010年10月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次配当）の中の「手術中の看護」の演習で使用する教材を作成した。手術室での手洗いやガウンテクニック、滅菌手袋の装着方法について具体的な手順を示したチェックリストを作成し、学生2人1組になり、1人の学生がチェックリストを読み上げ、もう1人の学生がそれに沿って実施した。これにより、教員がその都度チェックし、指導を行わなくても、個々の学生が手順通りに実施でき、また演習後に学生が復習する際にも活用された。
8.成人看護学実習における補助教材の作成	2009年10月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）、「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次配当）において、検査データや手術記録のみかたがわからずに戸惑う学生が多かったため、それらのみかたを図示したプリントを作成した。これを活用したところ、それまでより学生がスムーズに短時間で記録からの情報収集が行えるようになった。また、学生から「記録にある一つ一つの項目の意味やデータのみかたがわかった」等の意見が挙げられた。
9.実習指導マニュアルの作成	2008年5月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
		「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）、「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次配当）において、担当する病棟（消化器外科病棟、手術室、ICU）の特徴を踏まえ、それぞれの実習目標と対応させた学生指導を行う際の具体的方法や内容を記述したマニュアルを作成した。このマニュアルを作成することで、学生が実習目標を達成するために具体的にどのような実習場面が活用できるのか、どのように人・物・時間を調整したらよいのかが明確になり、その結果、学生の学習効果も高まった。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.武庫川女子大学大学院看護学研究科博士後期課程における教育実践	2017年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科博士後期課程の専任教員（2017年4月から現在に至る）として、「看護エビデンス特論」（共通教育科目、1年次配当）、「生涯発達看護学特論」（専門教育科目、1年次配当）、「特別研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を担当している。
2.武庫川女子大学看護学部の担任	2016年4月～2020年3月	武庫川女子大学看護学部2期生のクラス担任として、前期・後期の担任ガイダンスや学生との個別面談を通して、大学生活における学習面・生活面の相談、助言を行った。
3.武庫川女子大学看護学部における教育実践	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の専任教員（2016年4月から現在に至るまで准教授）として、「初期演習（生活と看護）」（基礎教育科目、1年次配当）、「成人看護学概論」（専門教育科目、1年次後期配当）、「臨床病態栄養学」（基礎教育科目、1年次後期配当）、「成人看護学Ⅱ（慢性期）」（専門教育科目、3年次前期配当）、「成人看護学実習（慢性期）」（専門教育科目、3年次後期・4年次前期配当）、「統合看護学実習」（専門教育科目、4年次配当）、「看護英文購読」（専門教育科目、4年次配当）、「卒業演習」（専門教育科目、4年次配当）を担当している。
4.兵庫県看護協会「再就業支援研修」講師	2016年4月～2021年3月	兵庫県看護協会主催の再就業支援研修の1つとして、体温・脈拍・血圧測定等の基本的なバイタルサインの測定とアセスメントの講師を務めた。また、事例を用いたバイタルサインとフィジカルアセスメントのグループワークを担当した。
5.Dマル合の評価	2016年4月	武庫川女子大学大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程設置に係る文部科学省の専任教員資格審査において、「研究指導（Dマル合）」の判定を得た。
6.武庫川女子大学大学院看護学研究科修士課程における教育実践	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の非常勤講師（2015年4月から2016年3月）、専任教員（2016年4月から現在に至る）として、「生涯発達看護学演習」（専門教育科目、1年次配当）、「生涯発達看護学特論Ａ（成人慢性看護学）」（専門教育科目、1年次配当）、「論理的思考論」（共通教育科目、1年次配当）を担当している。
7.Mマル合の評価	2015年	武庫川女子大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程設置に係る文部科学省の専任教員資格審査において、「研究指導（Mマル合）」の判定を得た。
8.天理医療大学医療学部看護学科のチューター	2014年4月～2016年3月	天理医療大学医療学部看護学科において、毎年約20名の学生のチューターを担当し、学習面や生活面の相談、助言、指導を行った。
9.天理医療大学医療学部看護学科における教育実践	2012年4月～2016年3月	天理医療大学医療学部看護学科の専任教員（2012年4月から現在に至るまで講師）として、を「人間関係とコミュニケーション」（総合基礎科目、1年次配当）、「実践基礎論Ⅱ（生きていくしくみを支える看護方法）」（専門科目、1年次配当）、「実践基礎看護学実習（生活を整える看護）」（専門科目、1年次配当）、「共通基盤看護学実践論Ⅱ（セルフケアを支える看護）」（専門科目、2年次配当）、「共通基盤看護学実

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		習Ⅲ（セルフケアを支える看護）」（専門科目、3年次配当）、「共通基盤看護学実習Ⅳ（急性期療養過程を支える看護）」（専門科目、3年次配当）、「健康支援方法論」（専門科目、4年次配当）、「看護実践能力の探求」（専門科目、4年次配当）「総合実習」（専門科目、4年次配当）を担当した。
10.愛知県立大学看護実践センター看護研究セミナー「看護研究個別指導」講師	2010年9月～2011年3月	看護職者の研究活動を支援する目的で企画された愛知県立大学看護実践センターの「看護研究個別指導」において、実際に勤務先の病院で看護研究を行う手術室看護師に対して、本人が立てた研究計画をもとに研究目的の明確化、研究方法の検討、データ収集と分析等、プロセスに沿って個別指導を行った。
11.看護教員看護教育学研修会「看護のフィジカルアセスメント」講師	2009年8月～2010年8月	愛知県下の看護教員や看護職員を対象に教育の場や臨床の場にいる看護職者のフィジカル・アセスメント能力の向上を目標とした研修会に講師として参加し、脳神経系および呼吸器のフィジカル・アセスメントの演習指導を担当した。参加者2人1組になり、患者役・看護師役を交代で実施した。一人の実施に時間をかけ、患者役・看護師役の両方を実際に行うことで、視神経、顔面神経、三叉神経、舌咽神経などの脳神経の診査技術、肺の位置の確認、肺の打診、胸郭の触診、肺の聴診などの技術が習得された。
12.愛知県立大学看護学部看護学科における教育実践	2008年4月～2011年3月	愛知県立大学看護学部看護学科の専任助教として、「成人看護技術論」（専門科目、3年次配当）、「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）、「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次配当）、「看護学演習Ⅰ」（専門科目、3年次配当）、「看護学演習ⅡB」（専門科目、4年次配当）、「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次配当）を担当した。
13.京都大学医学部保健学科における教育実践	2007年4月～2008年3月	京都大学医学部保健学科看護学専攻の非常勤講師として担当の「成人看護学急性期実習」（専門科目、3年次配当）において、患者に対する手術侵襲の影響、および侵襲からの身体的、心理的回復を促進する看護の理解と実践ができることを到達目標とし、主に眼科、耳鼻咽喉科領域の看護過程の展開や術後患者の観察・援助についての実習指導を行った。学生が受け持った眼科、耳鼻咽喉科で手術を受ける患者は比較的、手術時間、また在院日数も短い患者が多かったが、手術による侵襲だけでなく、局所・全身麻酔による影響についても学び、退院に向けた患者指導等も実践できた。
14.「難病等在宅療養者への食生活支援研修会」での講演	2005年6月	神経難病などで在宅で療養する方々への食生活支援のありかたについて検討するために開催された、大阪府北河内７市の医療介護施設に勤務する栄養士、看護師、保健師らを対象とした研修会の場で、本人がこれまで行った、在宅静脈栄養法施行患者のQOLに関する研究の成果について発表し、食生活支援のありかたについて講演した。講演後の参加者へのアンケートから、「静脈栄養法を特別な行為と思わずに日常生活における普段の行為として行いたい」といった療養者が望む声が聴けてよかったなどの意見が寄せられた。
15.京都府立医科大学付属病院での実習生への指導	2004年5月～2006年2月	京都府立医科大学付属病院で勤務していた消化器外科病棟において、「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）の実習生2名に対して、胃がん、大腸がんで手術を受ける患者を実習生の受け持ち患者として、手術前、後の観察やバイタルサインの測定、離床や清拭・寝衣交換等の援助の指導を行った。患者の状態の報告の場面では、観察したことだけでなく、それを踏まえたアセスメントについても報告するように指導したところ、徐々に実習生が自分の考えや援助の方向性を発言するようになり、最終レポートでは実習体

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		験を踏まえた学びについて論理的に述べられていた。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.保健婦免許 2.看護婦免許	2001年4月1日 2001年4月1日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.学部入試戦略チームとしての活動	2022年4月～現在	武庫川女子大学学部入試戦略チームのメンバーとして、入試判定や入試関連資料に基づく検討を行っている。
2.図書委員会としての活動	2022年4月～現在	武庫川女子大学図書委員会委員として、主に学科・研究科で講読する雑誌や電子ジャーナルについて予算を含めて検討している。また、文献データベース活用にあたっての注意事項について、学生・教員へ周知している。
3.看護学部・看護学研究科自己評価委員会としての活動	2022年4月～現在	武庫川女子大学看護学部・看護学研究科自己評価委員会の委員として、調査データをもとにした自己点検評価や、看護学教育評価受審に向けた準備に取り組んでいる。
4.予算委員会委員長としての活動	2022年4月～現在	武庫川女子大学看護予算委員会の委員長として、主に学科予算のヒアリングと申請、配分の検討、申請書および執行状況の確認を行っている。また、毎年、予算に関する学科内の申し合わせ等を見直し、改訂している。
5.看護学研究科教務・学位担当としての活動	2020年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の2020年度は教務担当として、主に時間割や授業予定表の作成、ガイダンスでの履修登録等の周知を行った。2021年度以降は学位担当として、「学位取得の手引き」の見直しと改訂、中間発表会および公開発表会の企画・運営、提出された学位論文やリポジトリ登録のための書類等の確認を行っている。
6.学生委員会の委員としての活動	2019年4月～2020年3月	武庫川女子大学看護学部学生委員会の副委員長として、体育祭・文化祭、卒業式、クラス幹事懇談会などのイベントの開催と運営について検討した。
7.教務委員会委員としての活動	2019年4月～現在	2019年度は武庫川女子大学看護学部教務委員会の副委員長として、主に卒業演習のスケジュールや学生配置、発表方法の検討等を担当した。2020～2021年度は委員長として、COVID-19感染予防マニュアル一講義・演習版の作成やKT作成等を担当した。
8.ジャーナル編集委員としての活動	2017年4月～2019年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル編集委員として、投稿規程や申し合わせ、原稿執筆要項などの見直し、投稿論文の確認と査読者の検討などを行った。
9.兵庫県看護協会生涯学習担当としての活動	2016年4月～2021年3月	兵庫県看護協会主催の看護師の再就業支援研修の担当として、バイタルサイン測定やフィジカルアセスメントの関する講義とグループワーク、シミュレータを用いた演習を担当した。
10.看護自己評価委員会担当としての活動	2016年4月～現在	武庫川女子大学の自己評価委員会の担当として、看護学部・看護学研究科の開学以降の自己評価報告書原案を毎年、作成している。また、各委員会・担当の活動報告の取りまとめを行っている。2022年度からは委員長として、卒業生へのアンケート調査、卒業生の就職先へのアンケート調査、教員へのアンケート調査も実施している。
11.臨地実習委員会委員としての活動	2016年4月～2019年3月	武庫川女子大学看護学部の臨地実習委員として、新入生への抗体価検査の企画・調整・実施・結果報告、ワ

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		クチン接種の勧奨などの感染対策を主に担当した。
12.自己点検評価実施委員会委員としての活動	2015年4月～2016年3月	天理医療大学の自己点検評価実施委員会の委員として、2014年度年報の作成に向け、大学や教員の教育活動や委員会活動、社会貢献等について評価し、原稿を作成した。主に初年次教育、宣誓式、社会貢献、内部質保証に関する章や節、項目を担当し、原稿を作成した。
13.宣誓式実行プロジェクト委員としての活動	2015年4月～2016年3月	天理医療大学の宣誓式実行プロジェクトの委員として、看護学科2回生後期に学生が看護への思いを一つにし、立派な看護師へと成長することを誓約することを目的に開学時より行われている看護宣誓式の運営、実施、評価に携わった。学生同士で話し合い、運営の係りやメンバーを決め、具体的な内容について検討するように促すとともに、当日に向けてのリハーサルの立会い、助言を行った。終了後は次年度の宣誓式に向けて改善点や継続すべき点について委員で話し合った。
14.チューター会議委員としての活動	2014年4月～2016年3月	天理医療大学のチューター会議の委員として、2014年度は看護学科1回生15名、2015年度は看護学科2回生16名のチューターを担当し、各年の年度初めと前期試験前、後期試験前の計3回、学生との個別面接を実施し、学業や生活上での悩みや困難がないか確認し、相談や助言を行った。また、各学期の試験終了後、所定の単位以上再試験科目がある学生と個別面接を実施し、再試験に向けての学習計画や取り組み状況の確認を行った。さらに、年2回開催されるチューター全体会議および年3回開催される各学科の学年ごとのチューター会議に参加し、担当する学生の状況について報告し、問題点や解決策についてチューター同士で話し合った。
15.公開講演会実行プロジェクト委員としての活動	2014年4月～2016年3月	天理医療大学の公開講演会実行プロジェクトの委員として、年に1回、学内の教職員および学生だけでなく他大学の学生、医療従事者など広く一般に公開される講演会の企画、運営、評価を行った。2015年度は特に参加者に配布するアンケートの作成、準備、集計、評価を担当した。
16.教員・教育組織能力開発委員会委員としての活動	2014年4月～2015年3月	天理医療大学の教員・教育組織能力開発委員会の委員として、学期ごとに実施される学生の授業評価の結果を受け、各科目の担当教員が自らの授業を振り返り、今後の改善策等を記載する教員所見の取りまとめと集計、自由記述欄の分類と要約を行った。また、年度末には学内教員向けのFD活動としてワークショップを企画、実施した。
17.図書委員会委員としての活動	2012年4月～2016年3月	天理医療大学の図書委員会の委員として、2011年度は主に、図書館に導入するデータベースの検討や蔵書希望図書の取りまとめを行った。 2012年度は図書の廃棄に関する細則の作成に携わるとともに、廃棄対象図書の選定を行った。 2013年度以降は蔵書希望図書の選定と取りまとめ、図書委員会に係る規定や細則の見直しを行った。
18.研究委員会委員としての活動	2012年4月～2015年3月	天理医療大学の研究委員会の委員として、2011年度は紀要規定および原稿の執筆要項の作成、公募から査読・編集・発行に至るまでのスケジュール案の作成を行った。また、学内の倫理委員会および研究実施施設の倫理委員会の審査を受けるにあたっての手続きをまとめたマニュアルを作成し、学内教員へ配布した。 2012年度は、学内教員を対象とした科学研究費獲得支援プロジェクトを企画するとともに、その中で獲得に向けた自らの体験談を発表した。また、看護に関わる民間の研究助成について調べ、一覧にして学内教員へ配信した。 2014年度は、学内教員向けに研究活動を推進するため

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		のリトリート・キックオフプログラムの企画、実施を担当した。
19.入試委員会委員としての活動	2011年4月～2012年3月	天理医療大学設立準備室の入試委員会の委員として、看護学科の推薦入試および一般入試の実施マニュアルの作成、事前の教職員を対象とした説明会の実施、必要物品の準備・確認を行った。入試当日は、グループ・ディスカッションの面接員、個人面接の誘導員を担当した。また、入試終了後、担当教員で会議を開き、改善を要する点とその解決策を検討し、その結果を踏まえ、次の入試に向け、実施マニュアルの追加修正を行った。
20.教務委員会委員としての活動	2011年4月～2012年3月	天理医療大学設立準備室の教務委員会の委員として、進級規定や既修得単位の認定規定などの履修規定（案）の作成に携わるとともに、学生向けの履修ガイドの原稿の作成と校正を行った。 また、2012年度開講科目で使用する教科書の取りまとめを行った。 さらに、新入生を対象とした入学直後の基礎学力を評価するための力試し試験の企画と実施を担当した。
21.学生委員会委員としての活動	2008年4月～2011年3月	愛知県立大学看護学部の学生委員会の委員として、学生生活にかかわる手引きの見直し、新入生オリエンテーション合宿の企画・運営、父兄のキャンパス見学の案内などを行った。また、健康管理担当として学部生と大学院生の健康診断の運営、卒業式などの救護係、実習における感染予防策および感染症、感染・汚染の機会を有する事故発生時の対応策の検討を行った。 また、2008年度は進路支援委員を兼ね、学部生の国家試験対策の説明、就職・大学院への進学の相談などにあたった。
4 その他		
1.第17回日本慢性看護学会学術集会学術集会賞	2023年9月2日	「診断後間もない成人期クローン病患者のセルフケア構築を支援する看護アセスメント項目の開発－デルファイ法を用いた妥当性と実用性の検証－」の発表に対して
2.第10回日本炎症性腸疾患学会学術集会優秀ポスター賞	2019年11月29日	「潰瘍性大腸炎における疾病負荷：QOLとうつ評価」の発表に対して
3.第7回日本炎症性腸疾患学会学術集会優秀ポスター賞	2016年7月10日	「クローン病患者の運動習慣についての実態調査」の発表に対して
4.日本看護科学学会学術論文奨励賞受賞	2013年12月1日	「クローン病患者への食事指導プログラムの開発と有効性の検証」論文に対して
5.日本看護研究学会奨励賞受賞	2012年7月1日	「クローン病者の食生活体験のプロセス」論文に対して

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.NiCE 病態・治療論［4］消化器疾患改訂第2版	共	2024年12月	南江堂	第Ⅱ章の消化・吸収機能が障害された患者への看護（pp.126-129）の執筆を担当した。機能性ディスペプシアや過敏性腸症候群などの心因性による消化器系の機能障害のある患者への看護、難治性の炎症性腸疾患患者への看護について、それぞれ看護のポイントと具体的な方法、根拠・理由について概説した。
2.新体系看護学全書 経過別成人看護学３慢性期看護第2版	共	2021年12月	メヂカルフレンド社	第4章慢性期にある人・家族への看護の「Ｖ潰瘍性大腸炎・クローン病」（pp.181-199）の執筆を担当した。疾患の概要、潰瘍性大腸炎・クローン病と共にある生活の理解とアセスメント、潰瘍性大腸炎・クローン病と共に生きる人への看護介入、家族へのケアについて概説した。
3.炎症性腸疾患（主にクローン病）患者に	共	2019年10月	消化器看護	炎症性腸疾患（主にクローン病）患者に対する栄養療法・食事療法の考え方や位置づけ、栄養剤の種類と適応、特徴について概説した

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
対する栄養療法・食事療法と支援				あと、患者へのケアのポイントを活動期と寛解期、さらに重症度ごとに解説した。
4.新体系看護学全書 経過別成人看護学３慢性期看護	共	2017年12月	メヂカルフレンド社	第4章 慢性期にある人・家族への看護の「Ｖ潰瘍性大腸炎・クローン病」（pp.165-183）の執筆を担当。疾患の概要、潰瘍性大腸炎・クローン病と共にある生活の理解とアセスメント、潰瘍性大腸炎・クローン病と共に生きる人への看護介入、家族へのケアについて執筆した。
5.基礎と臨床がつながる疾患別看護過程 PART2	共	2017年9月	学研メディカル秀潤社	クローン病の原因や症状、治療、一般的な経過について解説した上で、腸閉塞を起こした患者を事例として、情報収集からアセスメント、看護問題の抽出と絞り込み、看護計画の立案、評価までの一連の看護過程の展開について解説した。
6.基礎と臨床がつながる疾患別看護過程	共	2015年9月	学研メディカル秀潤社	潰瘍性大腸炎の原因や症状、治療、一般的な経過について解説した上で、肛門部に皮膚障害のある患者を事例として、情報収集からアセスメント、看護問題の抽出と絞り込み、看護計画の立案、評価までの一連の看護過程の展開について解説した。
2 学位論文				
1.クローン病者の食生活体験に関する研究	単	2008年3月	大阪大学大学院医学系研究科	クローン病者の食生活体験に焦点を当て、病者が発病後、処方された食事療法にどのように対応しているのか、食事を通じた他者との関わりの中で、どのような問題を抱え、それにどう対応してきたのかを明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて寛解期にあり在宅で生活している成人クローン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析、論文としてまとめた。結果、病者が食事制限と食欲との狭間で、標準的な食事療法から試行錯誤しながら自分に合った食生活スタイルを見出すプロセスが明らかになった。
2.在宅静脈栄養法施行患者のQuality of Lifeに関連する要因の分析	単	2003年3月	大阪大学大学院医学系研究科	在宅静脈栄養法(HPN)施行患者のQOLには身体・心理・社会的要因が影響を及ぼすものと考え、QOLにプラスまたはマイナスに働くと考えられる変数を選択し因果モデルを考案した。この因果モデルをデータに基づいて検証することを目的に、HPN施行患者27名に質問紙調査を実施した。結果、自覚症状が多くなると不安感が増強し、それがQOLを低下させる方向に影響した。また、活動レベルが良好なことは、自尊心を高め、高い自尊心は仕事への復帰を促し、それがQOLを高める方向に影響した。
3 学術論文				
1.クローン病患者へのセルフケア支援と効果に関する文献検討（査読付）	共	2025年3月31日	日本赤十字九州国際看護大学紀要、第23号、P.1-11.	クローン病患者へのセルフケア支援内容とその効果を文献から明らかにし、患者のセルフケアを高めるために有効な支援について検討することを目的として、16 文献について検討した。結果、クローン病患者へのセルフケア支援内容は、セルフモニタリングの強化 4 件、食事栄養療法 3 件、ストレスマネジメント 3 件、運動療法 3 件、生物学的製剤に対するアドヒアランス向上 2 件、禁煙 1 件であった。ストレスマネジメントに関する支援の効果として、症状や疾患活動性の改善、QOL の向上がみられた。運動療法に関する支援の効果として、骨密度や筋力、身体活動機能の向上、ストレスの低減、疾患活動性の低下、QOL の向上がみられた。 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。 共同発表者：山本孝治、布谷麻耶
2.Development of Japanese versions of the Autoimmune Bullous Disease Quality of Life and Treatment of Autoimmune Bullous Disease Quality of Life questionnaires（査読付）	共	2025年3月20日	The Journal of Dermatology, P.1-19. https://doi.org/10.1111/1346-8138.17707	日本語版Autoimmune Bullous Disease Quality of Life (ABQOL) と Treatment Autoimmune Bullous Disease Quality of Life (TABQOL)の尺度開発を目的として、原版の順翻訳、逆翻訳を実施し、プレテストによる認知的デブリーフィング、原作者との協議を経て日本語版尺度案を確定した。次に、147名の自己免疫性水疱症患者を対象とした調査結果を用いて、尺度の妥当性・信頼性を検証した。結果、確証的因子分析による適合度はABQOL、TABQOLともに弱い結果であったが、異文化間妥当性の検証では、妥当な因子構造と内的整合性、尺度得点が確認された。Bland-Altmanプロットにより、2回の測定結果の一致性が確認され、cronbach’s α係数はABQOLで0.872、TABQOLで0.903であり再現性・安定性、内的整合性が検証された。 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。 共同発表者：Chika Tanemura, Maya Nunotani, Kyoko Kawabata,

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				Yuki Morooka, Jun Yamagami, Risa Kakuta, Yasuko Saito, Yuichi Kurihara, Hayato Takahashi, Norito Ishii, Hiroshi Koga, Takekuni Nakama, Daisuke Hayashi, Sho Hiroyasu, Chiharu Tateishi, Daisuke Tsuruta, Dedee F. Murrell, Takashi Hashimoto
3.Development of a Burden Scale for Colonoscopy Experienced by Patients with Inflammatory Bowel Disease（査読付）	共	2025年2月	Inflammatory Intestinal Disease, 10(1), P.61-75. https://doi.org/10.1159/000543686	炎症性腸疾患患者の大腸内視鏡検査に伴う負担尺度を開発することを目的としてオンライン調査を実施した。173名を対象とした項目分析と因子分析の結果、検査中の痛み、前処置のつらさ、不安と検査後の症状、検査のための休みの取りづらさの4因子21項目を抽出した。Cronbach’s α係数は尺度全体で.875、再テスト法による級内相関係数は .879であった。外的基準との相関係数は、認知的評価測定尺度.615、検査に伴う不安 .582、検査に伴う痛み .544、検査の満足度 -.333であり、尺度の信頼性と妥当性が確認された。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：布谷麻耶、髙橋美宝、宮﨑拓郎
4.Development of a decision support tool for patients with Crohn’s disease considering biologic treatment（査読付）	共	2025年1月	Journal of International Nursing Research, 4(1), e2022-0005. https://doi.org/10.53044/jinr.2022-0005	生物学的治療選択に臨むクローン病患者の意思決定支援ツールを開発することを目的とし、オタワ意思決定支援フレームワークを枠組みとした原案を作成し、患者と医療者に原案を配付し、有用性と妥当性、情報の適切性について質問紙で評価を求めた。結果、患者18名、医療者6名の計24名から回答が得られ、原案の有用性評価は「とても役立つ」16名（66.7%）、「まあまあ役立つ」8名（33.3%）であり、妥当性の評価は知りたい情報が「よく示されている」17名（70.8%）であり、22名（91.7%）が情報の「バランスがとれている」と回答した。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：布谷麻耶、髙橋美宝、青山伸郎
5.寛解期にある潰瘍性大腸炎患者が抱える疾病に伴う不安（査読付）	共	2024年12月	日本難病看護学会誌, 29巻3号, P.46-55	寛解期にある潰瘍性大腸炎患者が抱える疾病に伴う不安を明らかにすることを目的として、寛解期にある20歳以上の患者12名に半構造化面接を行い、不安の誘因と構成要素、不安への対応の観点から質的記述的に分析した。結果：患者が抱える不安の誘因として【再燃の経験】、【便意切迫感】、【薬剤の副作用や効果減弱の経験】、【仕事と療養の両立困難】、構成要素として【再燃への不安】、【便失禁への不安】、【治療への不安】、【大腸喪失への不安】、【役割と関係性喪失への不安】、不安への対応として【再燃への対策】、【便失禁への対策】、【治療の相談と自己判断】、【病気の打ち明け】が抽出された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：髙橋美宝、布谷麻耶、青山伸郎
6.Development and examination of an educational program combining e-learning and face-to-face training that nurtures inflammatory bowel disease nurse specialists（査読付）	共	2024年12月	Inflammatory Intestinal Diseases, 10(1), P.1-9. https://doi.org/10.1159/000541485	炎症性腸疾患看護専門家を育成するために e-learningと対面研修を組み合わせた教育プログラムを開発し、その有効性を評価した。19名の参加者のデータを分析した結果、疾患活動性のアセスメントとセルフケア支援に関する知識と技能のスコアが教育プログラムを通じて上昇し、本プログラムの有用性が示唆された。 本人担当部分：計画・プログラム実施を担当。 共同発表者：Hikaru Mizuno, Yu Fujimoto, Yoshiko Furukawa, Mayu Katashima, Koji Yamamoto, Kayoko Sakagamim, Maya Nunotani , Natsuko Seto
7.Development and Validation of an E-Learning Educational Program for Acquiring Basic Knowledge in Inflammatory Bowel Disease Nursing	共	2024年5月	Inflammatory Intestinal Diseases, 9(1), P.125-134. https://doi.org/10.1159/000539005	炎症性腸疾患看護専門家を育成するためインストラクショナルデザインを用いた e-learning教育プログラムを開発し、有効性を評価した。63名の参加者のデータを分析した結果、疾患の関する基礎知識のプレテストの平均スコアは81.3%で、40名が80%以上のスコアであった。80%未満であった23名のうち19名がe-learning受講後にスコアが上昇し、参加者は本プログラムに非常に満足していた。 本人担当部分：計画・プログラム立案を担当。 共同発表者：Hikaru Mizuno, Yu Fujimoto, Yoshiko Furukawa, Mayu Katashima, Koji Yamamoto, Kayoko Sakagamim, Maya

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
（査読付）				Nunotani , Natsuko Seto
8.自己免疫性水疱症患者のQuality of Lifeに影響を及ぼす要因の検討：文献レビュー（査読付）	共	2024年4月	武庫川女子大学看護学ジャーナル，9巻，P.4-13	自己免疫性水疱症患者のQOLに影響を及ぼす要因を明らかにするために、文献調査を行った。医中誌web およびPubMed、CINAHL での検索の結果、計189 文献が抽出され、最終的に52 文献を分析対象とした。QOL に影響を及ぼす要因には、年齢・性別・併存疾患などの患者背景、病型、病変の部位・範囲、疾患の重症度・活動性、罹病期間、疾患経過、疼痛・そう痒感などの身体症状、治療状況、メンタルヘルス、仕事などがあった。 本人担当部分：結果のまとめを担当。 共同発表者：種村智香、布谷麻耶、師岡友紀、川端京子、橋本隆
9.診断後2年未満の成人期クローン病患者のセルフケア構築を支援する看護アセスメント項目の開発 ―デルファイ法を用いた妥当性と実用性の検証―（査読付）	共	2024年3月	日本看護科学会誌，43巻，P. 738-751	診断後2年未満の成人期クローン病患者のセルフケア支援で活用できるアセスメントツールの開発に向け，ツールに含む看護アセスメント項目の妥当性と実用性を検証することを目的として、クローン病患者への看護実践経験のある看護師に質問紙を配布して2回のデルファイ調査を実施した。結果、［自分の病気・治療・社会資源についての関心と理解］［病気の受け止めとセルフケアの目標］［ライフスタイル・ライフイベントに合わせたセルフケアの実践］［病状に応じたセルフケアの実践］［ストレスの認知と対処］［周囲からのサポート］の視点から成る計56項目を確定させた。 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。 共同発表者：山本孝治、布谷麻耶
10.炎症性腸疾患患者の大腸内視鏡検査に伴う苦痛の体験（査読付）	共	2023年10月	日本看護科学会誌，43 巻，P. 295-304	炎症性腸疾患患者が大腸内視鏡検査に伴いどのような苦痛を体験しているかを明らかにすることを目的として、寛解期の患者10名に半構造化面接を行い、質的記述的に分析した。結果、患者は大腸内視鏡検査に伴い、【前処置による心身の負担】【検査中の痛み】【検査への恐怖】【異性の医療者に対する抵抗感】【検査後の疲労と病状悪化】【検査結果への不安】【時間と費用の負担】という苦痛を体験していた。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：布谷麻耶、髙橋美宝
11.Construction of an explanatory model for quality of life in outpatients with ulcerative colitis（査読付）	共	2023年4月	Inflammatory Intestinal Diseases, 8 (1), P.23-33. https://doi.org/10.1159/000530455	外来通院する潰瘍性大腸炎患者のHRQoLの関連要因を特定し、モデル構築を目指し、横断的調査を実施した。203名の患者からの回答データを分析した結果、HRQoLの関連要因として、疾患活動性スコア、治療の副作用の有無、不安とうつスコア、体調不良時の相談相手の有無が特定され、不安とうつスコアがHRQoLの最大の影響要因であった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：髙橋美宝、布谷麻耶、青山伸郎
12.A Systematic Review of Self-Management Interventions for Patients with Inflammatory Bowel Disease（査読付）	共	2023年3月	Inflammatory Intestinal Diseases, 8 (1), P.1-12. https://doi.org/10.1159/000530021	炎症性腸疾患患者へのセルフマネジメント介入の現状と効果を検証するためにシステマティックレビューを行った。50件の文献を分析した結果、介入によるアウトカムの改善がみられたのは33件であり、大半が症状管理に関する介入であった。また、アウトカム改善がみられた介入の多くは患者参加型の個別介入で多職種で介入していた。 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。 共同発表者：飯沢まさみ、廣瀬理沙、布谷麻耶、中庄司幹子、坦ケ愛、Jovelle L. Fernandez
13.クローン病患者のセルフケアを支援するために必要となる看護アセスメント視点（査読付）	共	2022年12月	日本難病看護学会誌，27巻2号，P. 62-73	クローン病患者のセルフケアを支援するために必要となる看護アセスメントの視点を明らかにすることを目的として、クローン病患者の看護実践経験のある看護師12名にインタビューを行い、得られたデータを質的に分析しカテゴリー化した。結果、[自分の病気・治療・社会資源についての関心と理解]、[病気の受け止めとセルフケアの目標]、[ライフスタイル・ライフイベントに合わせたセルフケアの実践]、[病状に応じたセルフケアの実践]、[ストレスの認知と対処]、[周囲からのサポート]の６つのカテゴリーが生成された。 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。 共同発表者：山本孝治、布谷麻耶
14.看護の視点で捉える炎症性腸疾患活動性	共	2022年12月	日本慢性看護学会誌，16巻，P.21-	看護の視点で捉える炎症性腸疾患活動性評価項目を検討することを目的として，先行研究から疾患活動性に関わる記述を抽出したとこ

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
評価項目の検討（査読付）			33	ろ，967コードが得られた．NVivoを用いて質的帰納的に分析し，92項目を作成した．IBD看護に熟練した看護師に提示し，フォーカス・グループ・インタビューによる意見収集およびIBD看護専門家会議でコンセンサスを得たものを最終項目とした．結果，【炎症】11項目，【自覚症状】９項目，【IBDの認識】６項目，【生活の質】34項目，【治療】25項目の計85項目に精練され，表面的妥当性と論理的妥当性が整えられた． 本人担当部分：計画立案、コード抽出、結果のまとめを担当。 共同発表者：水野光、藤本悠、阪上佳誉子、山本孝治、布谷麻耶、片島麻佑、瀬戸奈津子
15.天疱瘡・類天疱瘡患者の日常生活における困難感（査読付）	共	2022年12月	日本看護科学会誌，42巻，P. 365-374	天疱瘡・類天疱瘡患者の日常生活における困難感を明らかにするために13名の患者に半構造化インタビューを行い、質的記述的に分析した。結果、患者は【症状により日常生活行動に支障を来す】【患部の必要な処置に伴い痛みや負担を感じる】【ステロイド療法の副作用により日常生活行動に制約がある】【希少疾患であること，他者に理解されないことで不安，孤独を感じる】【病気や治療，再燃に対する不安，恐れを感じる】【症状や治療の副作用による影響で人付き合いが難しい】【病気により学業，就職，仕事が思うようにいかない】と感じていた。 本人担当部分：結果のまとめを担当。 共同発表者：種村智香、布谷麻耶、師岡友紀、川端京子、鶴田大輔、橋本隆
16.クローン病患者のセルフケアに関する文献検討 ―国内外の文献を対象にした検討―（査読付）	共	2021年5月	日本慢性看護学会誌，第15巻第1号，P.1-11	クローン病患者のセルフケアの実態を明らかにし，患者のセルフケアを促進する看護実践への示唆を得ることを目的に文献検討を行った．国内外の30文献を分析した結果、クローン病患者のセルフケアの実態として，「クローン病に関する情報の獲得と療養法の模索」，「再燃を回避するための体調コントロール」，「腹部症状による病勢察知からの対処」，「腸管の炎症を起こす引き金となるストレスへの対処」，「試行錯誤により見出した自分に合った療養法の長期的な実践」，「症状コントロールおよび他者との付き合いを維持するための食事と排泄の工夫」，「家族や同病者，医療者からの支えで療養行動を強化」，「クローン病と共に生きる中での充実した生活の維持」が見出された． 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。 共同発表者：山本孝治、布谷麻耶
17.Gastroenterologists' perceptions and practice regarding shared decision-making for patients with Crohn's disease（査読付）	共	2021年3月	Journal of the Japan Academy for Health Behavioral Science, 35(2), 30-39.	クローン病患者を診療する日本の消化器専門医のSDMの認識と実践状況を明らかにし、SDM実践の関連要因について検討することを目的として全国規模のオンライン調査を実施した。結果、93名の分析対象者のうちSDMについて「知っている」と回答した者が58%であり、SDMを実践していた者は52%であった。SDM実践の障壁として「時間の不足」（91%）と「ツールの不足」（51%）が挙げられた。SDMの実践は治療法の決定の際に医師が何を重視するかに関連しており、「患者の希望・選好・価値観」を重視するか否かが最大の関連要因として特定された。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：布谷麻耶、石橋千夏
18.出雲地域における在宅高齢者の死生観と人生の最終段階の医療に関する意識との関連―アドバンス・ケア・プランニングの実現に向けての検討―（査読付）	共	2020年10月	日本健康医学会雑誌，第29巻第3号，P.288-302	出雲地域の在宅高齢者における人生の最終段階の医療に関する意識と死生観との関連性を検討することを目的に質問紙調査を実施した。531名の回答を分析した結果、「死を考えることを避けている」人は延命治療を受けることを希望、あるいは「わからない」と回答し、家族らと話し合っていなかった。一方、「死を考えることを避けていない」人は延命治療を希望し、家族らとの話し合いもすでに行っており、話し合いに肯定的であった。 本人担当部分：結果のまとめを担当。 共同発表者：加藤さゆり、徳重あつ子、杉浦圭子、久山かおる、布谷麻耶
19.繰り返し化学療法を受ける婦人科がん患者の配偶者の対処	共	2020年10月	日本がん看護学会誌，第34巻，P. 136-144	繰り返し化学療法を受ける婦人科がん患者の配偶者が体験する対処のプロセスを明らかにすることを目的に，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて情報収集、分析を行った．結

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
（査読付）				果，配偶者は妻の気持ちに添いたくても異性である自分には難しく，【妻の苦しみを前に自分の気持ちを抑え込む】ようにしながら，妻を支え続けていた． 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、片岡純、布谷麻耶
20.下肢慢性創傷患者における疼痛評価　ー日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2およびVisual Analogue Scaleを用いてー（査読付）	共	2019年12月	日本フットケア学会雑誌，第17巻第4号，P.186-191	慢性創傷患者の疼痛の性質や特徴を評価することを目的として、入院中の下肢に慢性創傷をもつ患者7名を対象として、VASに加え日本語版SF-MPQ-2を用いて調査を行った。結果、VASを用いた評価では、1名のみが中等度以上の強さの痛みを認めた。一方、SF-MPQ-2を用いた評価では、約40%は神経障害性疼痛の可能性があり、70%以上で痛覚過敏、アロディニアに関連した痛み表現を認めた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：種村智香、川端京子、布谷麻耶、宮本摂
21.炎症性腸疾患患者における治療選択の意思決定支援ー国内外の文献検討ー（査読付）	単	2019年5月	日本慢性看護学会誌，第13巻第1号，P.2-9	炎症性腸疾患患者の治療法の意思決定に焦点を当てた国内外の研究動向と今後の課題を明らかにすることを目的に文献検討を行った。結果、2016年以降、本テーマに関する研究が増えており、研究内容は「治療選択に臨む患者の体験」「患者の意思決定に向けた情報収集の実態とニーズ」「患者と医師それぞれの治療選好とその影響要因」「患者と医師それぞれのshared decision makingの認識・実態とその影響要因」「意思決定支援ツールの開発」に大別された。
22.慢性創傷患者における創傷処置時の疼痛緩和を目指して　痛みを我慢している患者に焦点を当てて（査読付）	共	2018年3月	日本看護学会論文集: 慢性期看護，48号，P.27-30	創傷処置時の疼痛緩和に向けた看護実践への示唆を得るために、実際に創傷処置を受けている慢性創傷患者を対象に、創傷処置の内容や疼痛の程度、疼痛への影響要因や鎮痛剤の使用状況について調査した。結果、対象者15名中11名が処置時に痛みを我慢していた。創傷処置時の疼痛要因としては「傷を擦る、悪い組織をとる」「ガーゼの固着」「創部の洗浄」「創周囲のテープの剥離」を選択回答した割合が高く、これらは、鎮痛剤使用者においても同様の結果であり、薬理的介入だけでは緩和できない疼痛の存在が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：種村智香、川端京子、布谷麻耶、宮本摂
23.Self-Control Trial : A Qualitative Grounded Theory Study on the Decision-Making Process in Patients with Ulcerative Colitis Who Choose to Use Complementary and Alternative Medicine（査読付）	単	2018年2月	Journal of Comprehensive Nursing Research and Care,3,122, DOI:http://dx.doi.org/jcnrc/2018/122	潰瘍性大腸炎患者がどのようにして補完代替医療を用いるか否かの決めているのか、その意思決定プロセスを明らかにすることを目的に、14名の患者に半構造化面接を行い、得られたデータをGrounded Theory Approachの手法に則り分析した。結果、“self-control trial”というコアカテゴリーが見出され、患者の意思決定プロセスには、「体調」、「実行可能性」、「他者からの影響」、「健康を取り戻したいという望み」、「不信」の5つのカテゴリーが含まれていた。
24.Effectiveness of a dietary support program based on behavior analysis approach for patients with Crohn disease(査読付)	単	2017年5月	Gastroenterology Nursing, 40(3), 229-238	クローン病患者の寛解維持と食事満足度向上に繋がる食行動の形成，維持に至るまでの行動変容を導くため，行動分析学的アプローチを組み込んだ食事指導プログラムを開発し，単一グループ前後比較デザインのもと介入研究を行った．参加者13名中11名がプログラムの終了まで参加し，介入により試し体験行動の頻度が増加したのは9名であり，7名がフォローアップ期においても行動を維持していた．疾患が増悪した者はおらず，7名に食事満足度の向上がみられたことから，本プログラムが患者の寛解維持と食事満足度向上に有効であることが示された．
25.クローン病患者の運動の捉え方と影響要因の検討（査読付）	共	2017年3月	日本難病看護学会誌，第21巻第3号，P.181-193	クローン病患者にとって運動がどのような効果があるのか、患者と運動との間にどのような影響因子があるのかを明らかにするために、アンケートの自由記載欄に回答のあった103名の記述をコード化し内容分析を行った。結果、運動の効果としては体力の向上と体調維持があり、運動の影響因子としては発病前の運動習慣や運動強度などがあった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：藤本悠、水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、、市川奈央

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				子、清水安子
26.炎症性腸疾患患者の生物学的治療選択に関する意思決定プロセス（査読付）	共	2016年12月	日本看護科学会誌，36巻，P.121-129	炎症性腸疾患患者の生物学的治療選択に関する意思決定プロセスを明らかにすることを目的に、Grounded theory approachを用いて、寛解期にある20名の患者に半構造化面接を行い、継続比較分析を行った。結果、患者の意思決定プロセスとして「症状軽減を狙った賭けに出るか否か」というコアカテゴリーが抽出され、患者が治療に伴う利害にどのように重きを置くかによって、治療選択の決断が異なることが示された。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：布谷麻耶、鈴木純恵
27.進行期卵巣がんの妻と療養を共にした壮年期配偶者の体験－2人の遺族の分析－（査読付）	共	2015年3月	天理医療大学紀要，第3巻第1号，P.16-24	進行期卵巣がん患者の療養過程における壮年期配偶者の体験を明らかにすることを目的に、2名の遺族を対象に半構造化面接を行い、データを質的に分析した。結果、卵巣がんの診断から死まで妻が生きることを支え続ける配偶者の体験が明らかになるとともに、配偶者への長期的な支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
28.炎症性腸疾患患者を対象としたセルフマネジメント介入の研究動向（査読付）	単	2014年12月	日本難病看護学会誌，第19巻第2号，P.201-211	炎症性腸疾患患者のセルフマネジメントに焦点を当てた介入研究の研究動向、介入効果や今後の課題について明らかにすることを目的として、32件の英語文献を分析した。結果、ここ10数年で本テーマに関する研究が増加していた。疾患に関する知識の習得や向上はいずれの介入でも効果がみられたが、知識の習得が患者のQOLや身体・心理的健康状態の改善には繋がっておらず、患者教育のあり方を見直す必要性が示唆された。
29.静脈血採血技術を修得するための新人看護職員を対象とした集合研修の評価（査読付）	共	2013年1月	天理医療大学紀要，第1巻第1号，P.11-21	新人看護職員と実地指導者が各々の課題を明確にすることを目標に、新人看護職員研修の一環として企画した静脈血採血技術の集合研修を両者の視点から評価することを目的に、自由記載による振り返り用紙の記述内容を質的に分析した。結果、新人看護職員は手技の未熟さ、患者への配慮不足といった実践上の課題を見出しており、実地指導者は不十分な個別指導、指導することに対する気負いや緊張といった指導上の課題を見出していた。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者名：布谷麻耶、石田寿子、有田秀子、川口ちづる、岡田三枝、高田幸恵、森継知恵美、有田清子
30.クローン病者がウェブ上で闘病記を綴ることの意味（査読付）	単	2012年12月	日本難病看護学会誌，第17巻第2号，P.151-162	クローン病者がウェブ上で綴り、公開している闘病記の実態を明らかにし、病者にとって闘病記が持つ意味について考察することを目的に、162件のブログによる闘病記について分析した。結果、ウェブ上で綴る闘病記には、読者とのコミュニケーションツール、同病者との交流の場、健康状態のモニタリングツールとしての意味が見出され、臨床の場を越えた看護支援の可能性が示唆された。
31.クローン病患者への食事指導プログラムの開発と有効性の検証（査読付）	共	2012年9月	日本看護科学会誌，第32巻第3号，P.74-84	クローン病患者の寛解維持と食事満足度の向上を目的に食事指導プログラムを開発し、ランダム化比較デザインのもとその有効性を検証した。結果、プログラムを適用した介入群において、試し体験行動が有意に増加した。疾患の増悪はなく、食事満足度に有意な変化はなかった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者名：布谷麻耶、鎌倉やよい、深田順子、熊澤友紀
32.地域高齢者における保健行動に関連した自己制御尺度の開発（査読付）	共	2012年9月	日本看護科学会誌，第32巻第3号，P.85-95	地域高齢者の保健行動に関連する自己制御力を評価する尺度を開発することを目的に、地域高齢者1,883名を対象に質問紙調査を郵送法で実施した。さらに、地域高齢者38名に対し、歯磨き行動を維持するプログラムに１ヵ月間参加することを求め、介入前とその1.5ヵ月後に尺度を用いて調査した。結果、自己制御尺度の妥当性と信頼性が確認された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者名：深田順子、鎌倉やよい、坂上貴之、百瀬由美子、布谷麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり
33.周術期患者に対する寝衣交換技術の向上を目指した教育実践	共	2011年12月	愛知県立大学看護学部紀要，第17巻第1号，P.25-32	術後疼痛があり輸液・カテーテル類が挿入されている患者の寝衣交換ができることを目指して、従来の教育方法に加えて寝衣交換に対する学生による自己評価及び教員等による他者評価を形成的に実施

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
（査読付）				し、その効果を学修達成度から明らかにした。結果、学修達成度が「非常に・大体当てはまる」と自己評価した割合が75％以上の項目は、学内演習では9項目、術後患者に初めて寝衣交換を実施した際では0項目、実習終了時では19項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。 共著者名：深田順子、熊澤友紀、鎌倉やよい、布谷麻耶、榊原由美子、鶴田淳一、山田佳代子、兵藤千草
34.PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者における口腔保健行動に関連する評価尺度の開発（査読付）	共	2011年9月	日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌，第15巻第2号，P.199-208	高齢者が自律的に実行できる口腔ケアプログラムの開発を目指し、PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた口腔保健行動に関連する評価尺度を開発することを目的に、地域高齢者および同居家族を対象に質問紙調査を郵送法で実施した。分析対象は803名で、因子分析等の結果、口腔保健行動に関連する尺度41項目のうち25項目が選定された。PRECEDEモデルとの適合度は、GFI0.866、AGFI0.837を示し、内的整合性を示すα係数は尺度全体で0.773であり、評価尺度の妥当性と信頼性は許容範囲であることが確認された。 本人担当部分：計画立案、データ収集を担当。 共著者名：深田順子、鎌倉やよい、百瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり、坂上貴之
35.看護基礎教育における周術期の臨床判断力の向上を目指した教育実践（査読付）	共	2010年12月	愛知県立大学看護学部紀要，第16巻第1号，P.31-39	周術期患者に対するフィジカル・アセスメントに基づいた判断力の向上を目指して、実習におけるフィジカル・アセスメント技術に対し学生による自己評価と教員等にによる他者評価を実施し、その効果を学修達成度から明らかにした。結果、学修達成度が「非常に・大体当てはまる」の割合が自己・他者評価とも75％以上の項目は、実習初日の学内演習では8項目、臨地実習では9項目、実習終了時では24項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。 共著者名：深田順子、熊澤友紀、吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい、竹内麻純、鈴木さおり、兵藤千草
36.地域高齢者の口腔保健行動－PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた類型化－（査読付）	共	2010年3月	身体教育医学研究，第11巻第1号，P.27-35	高齢者が主体的・自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階としてヘルスプロモーションの観点から高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにすることを目的にシニアクラブに所属する高齢者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。得られたデータをPRECEDEモデルを基に分類と抽象化を行い、介入の視点を検討した。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析、論文執筆までを担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、百瀬由美子、深田順子、森本紗磨美、横矢ゆかり、藤野あゆみ、坂上貴之、鎌倉やよい
37.クローン病者の食生活体験のプロセス（査読付）	共	2009年12月	日本看護研究学会雑誌，第32巻第5号，P.19-28	クローン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クローン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
38.クローン病者のQOL研究の現況－1996～2005年－（査読付）	共	2007年12月	日本看護研究学会雑誌，第30巻第5号，P.77-82	クローン病者への看護の質向上に向け、今後必要とされる研究について検討することを目的に、クローン病者のQOLに関する過去10年間の国内外の文献141件を対象とし、研究方法と内容について分析した。結果、このテーマに関する研究は増加傾向にあり、量的研究が9割以上を占め、データ収集法は既存の尺度を用いた質問紙法が6割を占めていた。さらに、研究内容はQOLの尺度開発に関する研究、QOLの影響要因に関する研究など7種類に分類された。 本人担当部分：文献収集から分析、論文執筆まですべて担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
39.クローン病者の食事を通じた他者との関わりの体験（査読付）	共	2007年12月	日本難病看護学会誌，第12巻第2号，P.147-155	クローン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クローン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
40.在宅静脈栄養法施行患者のQuality of Lifeに関連する要因の分析（査読付）	共	2004年4月	日本看護研究学会雑誌，第27巻第1号，P.107-113	在宅静脈栄養法(HPN)施行患者のQOLには身体・心理・社会的要因が影響を及ぼすものと考え、QOLにプラスまたはマイナスに働くと考えられる変数を選択し因果モデルを考案した。この因果モデルをデータに基づいて検証することを目的に、HPN施行患者27名に質問紙調査を実施した。結果、自覚症状が多くなると不安感が増強し、それがQOLを低下させる方向に影響した。また、活動レベルが良好なことは、自尊心を高め、高い自尊心は仕事への復帰を促し、それがQOLを高める方向に影響した。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、高木洋治
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.天疱瘡・類天疱瘡患者が病いに伴い感じる困難ーアンケートの自由記述の内容分析ー	共	2024年8月25日	第29回日本難病看護学会学術集会（於静岡県コンベンションアーツセンター）	天疱瘡・類天疱瘡患者が病いに伴い感じる困難について、アンケート調査の自由記述の内容を分析した。74名の回答を分析した結果、患者が最も困難を感じたエピソードは、【初期症状の発見、診断の遅れ】であり、続いて【ステロイドの副作用】【日常生活への支障】【ボディイメージ、外観の変化】【仕事や経済面】【摂食の困難さ】等が挙げられた。 本人担当部分：結果のまとめを担当。 共同発表者：種村智香、布谷麻耶
2.Anxiety Associated with Diseases of Patients with Ulcerative Colitis in Remission	共	2024年3月6日	27th East Asian Forum of Nursing Scholars conference (Hong Kong)	寛解期にある潰瘍性大腸炎患者が疾病に伴い抱える不安を明らかにすることを目的として、12名の患者にインタビュー調査を行い、質的記述的分析を行った。結果、患者が疾病に伴い抱える不安として「再燃に関する不安」「便失禁に関する不安」「治療に関する不安」「大腸喪失への不安」「役割・関係性喪失への不安」が抽出された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：髙橋美宝、布谷麻耶、青山伸郎
3.Literature Review on Self-Care Support for Patients with Crohn’s Disease	共	2024年3月6日	27th East Asian Forum of Nursing Scholars conference (Hong Kong)	クローン病患者へのセルフケアを高めるための看護支援への示唆を得ることを目的として、セルフケア支援の内容と効果について文献検討を行った。国内外の16件の文献を分析した結果、クローン病患者のセルフケア支援として食事、運動、ストレスといった多様な内容とその効果が確認できた。患者のセルフケアを包括的に捉え支援することで、より有効な効果が期待できると考えられた。 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。 共同発表者：山本孝治、布谷麻耶
4.診断後間もない成人期クローン病患者のセルフケア構築を支援する看護アセスメント項目の開発 ーデルファイ法を用いた妥当性と実用性の検証ー	共	2023年9月2日	第17回日本慢性看護学会学術集会（於ステーションコンファレンス川崎）	診断後間もない成人期クローン病患者のセルフケア支援のための看護アセスメント項目の妥当性と実用性を検討することを目的として、看護師466名を対象に２回のデルファイ調査を実施した。第１回調査では146名、第2回調査では94名から回答を得た。同意率80％未満の項目は研究者間で検討の上、削除し、最終的に［自分の病気・治療・社会資源についての関心と理解］12項目、［病気の受け止めとセルフケアの目標］9項目、［ライフスタイル・ライフイベントに合わせたセルフケアの実践］9項目、［病状に応じたセルフケアの実践］18項目、［ストレスの認知と対処］4項目、［周囲からのサポート］4項目、合計56項目のコンセンサスを得た。 本人担当部分：計画立案、項目検討、結果のまとめを担当。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
5.クローン病患者の生物学的治療選択を支援するディシジョン・ エイドの開発	共	2021年12月4日	第41回日本看護科学学会学術集会（オンライン開催）	共同発表者：山本孝治、布谷麻耶 生物学的治療選択に臨むクローン病患者の意思決定を支援するためのディシジョン・エイド（以下、DA）を開発することを目的に、患者2と医療者（消化器内科医、看護師）を対象に原案を配付し、有用性と妥当性、情報の適切性について質問紙調査を行った。結果、患者18名、医療者6名の計24名から回答が得られ、原案の有用性と妥当性が確認された。自由記載の回答から抽出した改善点をふまえ原案を修正しDAを開発した。 本人担当部分：研究の全過程を担当
6.クローン病患者のセルフケアを促進するために必要となるアセスメント視点の明確化（第2報）	共	2021年8月21日	第47回日本看護研究学会学術集会（オンライン開催）	布谷麻耶、石橋千夏、中山和弘 クローン病患者のセルフケアを促進させる支援において、看護師がどのような視点でアセスメントを実施しているのかを明らかにすることを目的として、クローン病患者の看護実践に５年以上取り組んでいる看護師12名に個別インタビューを実施した。質的記述的に分析した結果、腸管合併症の症状の有無や病気の受け止め方、家族を含めたサポート体制、ストレスに対するコーピング行動に関するアセスメント視点が抽出された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。
7.A Systematic Review of Self-Management Intervention Study for Patients with Inflammatory Bowel Disease	共	2021年7月3日	16th congress of European Crohn’s and Colitis Organization (Web)	共同発表者：山本孝治、布谷麻耶 We conducted a systematic literature review to clarify the present status and efficacy of self-management for IBD patients and find out the effective methods of self-management intervention. Fifty studies met the inclusion criteria and were finally included in this review. Among 50 studies, 33 studies have statistically significant differences in the outcomes. The most common intervention was informational, subsequently management of psychological effects. The most common outcome was Inflammatory Bowel Disease Questionnaire. We found that psychological management and interventions related to problem-solving, goal setting, action plan, and coping skills had a positive effect on the body and psychology of IBD patients. 本人担当部分：計画立案、結果のまとめを担当。
8.Construction of an explanatory model for quality of life in outpatients with ulcerative colitis	共	2021年7月3日	16th congress of European Crohn’s and Colitis Organization (Web)	共同発表者：飯沢まさみ、廣瀬理沙、坦ケ愛、布谷麻耶 We aimed to develop and evaluate a predictive explanatory model for HRQoL among outpatients with UC in Japan. We conducted a cross-sectional survey. Psychological symptoms had the most direct effect on HRQoL in patients with UC and acted as a mediator in the relationship between social support and HRQoL. 本人担当部分：研究の全過程を担当
9.Nurses’ perspectives on assessments required to promote self-care among patients with Crohn’s disease: An initial report	共	2021年4月15日	24th East Asian Forum of Nursing Scholars (Web)	共同発表者：髙橋美宝、布谷麻耶、青山伸郎 This study aimed to assess the perspectives of nurses when conducting assessments to help promote self-care among patients with Crohn’s disease. As a result of the interview analysis, five categories were extracted for ”disease awareness and health management”. For ”nutrition and diet,” two categories were extracted. For ”excretion,” two categories were extracted. 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。
10.A literature review of self-care in patients with Crohn’s Disease	共	2020年12月17日	The 8th Annual Meeting of Asian Organization for Crohn’s & Colitis (Busan)	共同発表者：山本孝治、布谷麻耶 This review aimed to clarify the actual self-care undertaken by patients with Crohn’s disease. We analyzed 30 articles. Eight categories were extracted; Acquisition of information about CD and exploration of self-care methods, Health control to avoid flare-ups, Response after the disease was detected with abdominal symptoms, Handling of stress triggering bowel inflammation, Long-term practice of a correct self-care method found through trial and error,

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				Modifications to diet and excretion to control symptoms and maintain relationships with others, Enhancement of self-care behavior with support by family members, patients with the same disease, and health care professionals, Maintenance of fulfilling life while the living with CD. 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：山本孝治、布谷麻耶
11.Nurses' support for patients with inflammatory bowel disease in their treatment decision-making: a qualitative study	共	2020年2月28日	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (Osaka)	We aimed to explore the nurses' experiences in supporting the patients with IBD in their treatment decision-making. Through the constant comparative analysis, the nurses' support for patients with IBD was categorized into the following: (1) learning support to make a treatment decision, (2) intermediary support between the patients and healthcare professionals, (3) support to draw and clarify the patients' values, and (4) support to create a decision together. 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：布谷麻耶、石橋千夏、青山伸郎
12.Disease burden of patient with inflammatory bowel disease from the viewpoint of QOL and depression	共	2020年2月15日	15th congress of European Crohn's and Colitis Organization (Vienna)	We aimed to examine disease burden and the relationship between QOL and depression in Japanese patients with IBD. Decrease in QOL and depression in active phase were higher than those in remission phase, but no difference was noted in the age or sex and disease duration. In remission, the correlation in women was considerably higher than that in men. 本人担当部分：データの分析と結果のまとめを担当 共同発表者：髙橋美宝、青山伸郎、布谷麻耶
13.炎症性腸疾患における疾病負荷：QOLとうつ評価	共	2020年2月7日	第16回日本消化管学会総会学術集会（於姫路キャッスルグランヴィリオホテル）	炎症性腸疾患患者のQOLとうつとの関連について検討することを目的に炎症性腸疾患患者231名に調査を行った．結果，QOLスコアとうつスコアとの間には有意な相関がみられ、活動期では寛解期に比べより強い相関がみられた。 本人担当部分：データの分析と結果のまとめを担当 共同発表者：髙橋美宝、青山伸郎、布谷麻耶
14.潰瘍性大腸炎における疾病負荷：QOLとうつ評価	共	2019年11月29日	第10回日本炎症性腸疾患学会学術集会（於アクロス福岡）	潰瘍性大腸炎による疾病負荷についてQOLとうつの観点から評価することを目的に、200名の患者を対象に質問紙調査を行った。結果、活動期では寛解期に比べQOLが有意に低下しており、うつスコアも有意に高かった。QOL低下とうつとの間には正相関を認め、寛解期でも女性は男性より相関が強くみられた。 本人担当部分：データの分析と結果のまとめを担当 共同発表者：髙橋美宝、青山伸郎、布谷麻耶
15.クローン病患者を診療する消化器専門医のShared Decision Makingの実践と関連要因の検討	共	2019年11月29日	第10回日本炎症性腸疾患学会学術集会（於アクロス福岡）	クローン病患者を診療する消化器専門医のShared Decision Making（SDM）の認識と実践状況を明らかにし、SDM実践の関連要因を検討するために全国規模のオンライン調査を実施した。93名の回答を分析した結果、約半数がSDMを用いて治療を決めており、患者の希望・選好・価値観を重視するか否かがSDM実践の最大の関連要因として特定された。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：布谷麻耶、石橋千夏、中山和弘
16.炎症性腸疾患患者へのe-ポートフォリオを用いたセルフケア支援アプリの開発	共	2018年7月14日	第12回日本慢性看護学会学術集会（於TKPガーデンシティ品川）	炎症性腸疾患患者を対象にe-ポートフォリオを用いたセルフケア支援アプリを開発することを目的に、外来患者に試用し、8週間後に質問紙により意見を求めた。結果、セルフケアに役立ったという意見のほか、システムの不具合に関する指摘やSNS機能の希望があり、これらの意見を参考に修正版を作成した。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：富田真佐子、鈴木浩子、片岡優実、布谷麻耶、辻岡卓
17.IBD治療決定に際しての看護師の関与	単	2018年2月9日	第14回日本消化管学会総会学術集会（於京王プラザホテル）	これまでに行った炎症性腸疾患患者および患者のケアに携わる看護師への面接調査の結果をもとに、治療の選択・決定において患者がどのような状況にあるのか、また治療の選択・決定に際して看護師に求められる役割や支援について発表した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
18.CDDPまたはCBDCA併用化学療法を受けた肺がん患者の遅発性悪心・嘔吐の実態調査	共	2017年10月22日	第55回日本癌治療学会学術集会（於パシフィコ横浜）	初回CDDPまたはCBDCA併用化学療法を受けた肺がん患者の、遅発性悪心・嘔吐の発現状況と食事摂取量や栄養状態との関連について検討するために、肺がん患者33名について治療開始前日から7日目までの悪心・嘔吐の有無、排便回数、食事摂取量、BMI、TP、Albをカルテより後向き観察研究で調査した。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：樽井亜紀子、川端京子、布谷麻耶、南裕美、工藤貴子、鈴村倫弘、光岡茂樹、渡邊徹也、川口知哉、平田一人
19.慢性創傷患者における創傷処置時の疼痛緩和を目指して一痛みを我慢している患者に焦点を当てて一	共	2017年9月1日	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会（於神戸ポートピアホテル）	慢性創傷患者の処置時の疼痛を緩和するための方法を見出すために、創傷処置時の疼痛要因、疼痛状況、処置内容、鎮痛剤の使用状況を調査した。結果、対象者15名中11名が処置時に痛みを我慢しており、処置前の鎮痛剤使用率は36.4%と低く、適切なタイミングでの薬理的介入と個々の疼痛要因へ配慮する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：種村智香、宮本摂、布谷麻耶、川端京子
20.小児科に通院している20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に対する思い	共	2017年9月1日	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会（於神戸ポートピアホテル）	小児期に1型糖尿病を発症し20歳を超えて小児科通院する患者の移行期医療に対する思いを明らかにするために、自記式質問紙調査を行い、自由記載欄への回答を質的に分析した。結果、回答者の多くは診療科が変わることへの不安から主治医の変更を伴う転科を望んでおらず、小児科主治医による治療継続を希望していた。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：江尻加奈子、布谷麻耶、川端京子
21.小児科に通院している20歳以上の1型糖尿病患者の医療費に対する負担感ー自記式質問紙の自由記載よりー	共	2017年7月16日	第23回日本小児・思春期糖尿病研究会年次学術集会（於品川グランドセントラルタワー）	小児期に1型糖尿病を発症し20歳を超えて小児科通院する患者の医療費に対する思いを明らかにするために、自記式質問紙調査を行い、自由記載欄への回答を質的に分析した。29名の回答を分析した結果、収入に対する医療費の割合の高さや医療費負担によるインスリン治療法の選択の制限などの意見がみられた。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：江尻加奈子、布谷麻耶、川端京子
22.小児科外来に通院する20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に向けた準備状況	共	2017年5月20日	第60日本糖尿病学会年次学術集会（於名古屋）	小児科外来に継続して通院する20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に対する患者自身の準備状況を把握するために、自己管理状況の達成度と移行期医療に関する要望や意見を問う質問紙調査を実施した。67名の回答を分析した結果、患者自身の1型糖尿病の自己管理状況の達成度は高かったが、HbA1cの目標達成状況は3割程度であった。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：江尻加奈子、布谷麻耶、川端京子
23.慢性創傷患者における疼痛の質的評価-日本語版Short-Form McGill PainQuestionnaire-2 を用いて-	共	2017年3月24日	第15回日本フットケア学会年次学術集会（於岡山）	慢性創傷患者を対象に、日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2（SF-MPQ-2）を用いて、平常時の状態での疼痛の質的評価を行った。結果、対象者は、平常時より持続的な痛みの性質が強い複雑な疼痛を抱えていた。また、痛みの強い対象者では、侵害受容性慢性疼痛、神経障害性疼痛に関連した痛覚過敏やアロディニアの徴候が認められた。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：種村智香、宮本摂、布谷麻耶、川端京子
24.化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者へのケアモデル案の作成と評価	共	2016年8月28日	日本家族看護学会学術集会（於山形）	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者に対するケアモデル案を作成し、その評価を行うことを目的に、まず国内外の文献検討を行い、33件を選択した。これらの論文結果および著者らの先行研究結果から、配偶者のケアに関する内容を抽出し、意味内容に応じてカテゴリ化し、ケアモデルの構成要素としてケアモデル案を作成した。次に、がん診療拠点病院の婦人科病棟に勤務する看護師を対象にグループインタビューを行い、ケアモデル案の妥当性と実用性を評価した。結果、ケアモデル案の内容の妥当性は認められたものの、配偶者に関わる機会の少なさが障壁となり、配偶者へ直接介入するケア項目の実践は困難なことが明らかとなった。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶、片岡純、小林珠美
25.クローン病患者の疾患と運動の関連につ	共	2016年8月27日	第21回日本難病看護学会学術集会	クローン病患者の疾患と運動の関連について検討することを目的に、専門クリニックに通院するクローン病患者に無記名自記式アン

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
いての検討；自由記載の質的研究			（於北海道医療大学当別キャンパス）	ケート調査を行い、自由記載欄の記述内容を質的帰納的に分析した。結果、患者の考える運動の効果と運動の促進・阻害因子が明らかになった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：藤本悠、水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、、市川奈央子、清水安子
26.潰瘍性大腸炎患者の補完代替医療選択に関する意思決定	単	2016年8月27日	第21回日本難病看護学会学術集会（於北海道医療大学当別キャンパス）	潰瘍性大腸炎患者の補完代替医療を用いるか否かの意思決定プロセスを明らかにすることを目的に、Grounded Theory Approachを用いて、寛解期にある患者14名に半構造化面接を行い、継続比較分析を行った。結果、患者が補完代替医療を用いるか否かの意思決定プロセスは、「体調の良し悪し」の判断を起点とし、「セルフコントロール欲求と不信とのバランス」をいかにとるかに依っており、このバランスには「他者からの影響」と「補完代替医療の実行可能性」が影響していた。
27.クローン病患者の運動習慣についての実態調査	共	2016年7月10日	第7回日本炎症性腸疾患学会学術集会（於国立京都国際会館）	クローン病患者の運動習慣を明らかにし、症状と運動習慣との関連性を検討することを目的に、アンケートによる横断的調査を実施した。205部アンケートを配布し、196部の有効回答が得られた。運動群97名と非運動群98名を比較した結果、食欲の低下、腹痛、発熱の3項目において運動群が非運動群より有意に症状が少なかった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、藤本悠、市川奈央子、清水安子、阪上佳誉子、伊藤裕章
28.化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験する困難と対処	共	2015年9月6日	日本家族看護学会第22回学術集会（於国際医療福祉大学小田原保健医療学部）	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験している困難と対処を明らかにすることを目的に、配偶者10名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、配偶者が抱える7つの困難と9つの対処法が明らかになり、時間経過とともに現れる困難と対処法は異なっていた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶、片岡純
29.卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者のSpiritual Needs	共	2015年9月6日	日本家族看護学会第22回学術集会（於国際医療福祉大学小田原保健医療学部）	卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者が抱くSpiritual Needs を配偶者の語りから抽出することを目的に、配偶者2名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、「家族の健康を守りたい」「常に一緒にいたい」等の高齢配偶者が抱く5つのSpiritual Needs が抽出された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：福田陽子、松井利江、布谷麻耶
30.クローン病者への行動分析学的アプローチに基づく食事指導プログラムの効果	単	2015年7月25日	第20回日本難病看護学会学術集会（於東京都大田区産業プラザPIO）	クローン病者が症状の寛解を維持し、かつ食事満足度が向上することを目的に開発した食事指導プログラムに、病者の試し体験行動の形成から維持に至るまでの行動変容を導くため、行動分析学的アプローチを基に修正を加え、その効果を検証した。結果、修正プログラムは、病者が病状を維持したまま試し体験行動を増加、継続するのに有効であり、食事満足度を向上させる効果も示された。
31.「悪化した病状を抱えて生存する時期」における卵巣がん患者の配偶者の体験―遺族の語りからの分析―	共	2014年11月1日	第38回日本死の臨床研究会年次大会（於別府国際コンベンションセンタービーコンプラザ）	卵巣がん患者が「悪化した病状を抱えて生存する時期」における配偶者の体験を明らかにすることを目的に、配偶者（遺族）3名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、配偶者は、「少しでも長く妻に生きていてほしい」という願いを軸に、「妻の死を意識する自分と向き合う」ことをしながら、「改めて夫婦であることを見つめる」ことを繰り返し、変化していく妻の病状に対応して「生活を再編する」体験をしていた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
32.炎症性腸疾患患者を対象としたセルフマネジメント介入の研究動向	単	2014年8月30日	第19回日本難病看護学会学術集会（於広島国際大学呉キャンパス）	炎症性腸疾患患者のセルフマネジメントに焦点を当てた介入研究の研究動向、介入効果や今後の課題について明らかにすることを目的として、32件の英語文献を分析した。結果、ここ10数年で本テーマに関する研究が増加していた。疾患に関する知識の習得や向上はいずれの介入でも効果がみられたが、知識の習得が患者のQOLや身体・心理的健康状態の改善には繋がっておらず、患者教育のあり方を見直す必要性が示唆された。
33.卵巣がん患者の配偶	共	2013年11月	第37回日本死の臨	卵巣がん患者の療養過程における配偶者の心理プロセスを明らかに

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
者が語る体験プロセスから見出されたもの		1日	床研究会年次大会（於くにびきメッセ）	することを目的に、配偶者（遺族）3名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、化学療法の効果が得られなくなった時期に夫は妻の病状の変化を感じ取り、化学療法に代わる新たな治療法を模索していた。また、病状の悪化する妻を支えることに専念するため、夫または子供が仕事を辞めていた。さらに、夫は身内や親しい医療関係者に相談して問題解決に取り組んでいた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
34.クローン病患者の食事満足度に関連する要因の分析	単	2012年8月1日	第17回日本難病看護学会学術集会（於セシオン杉並）	クローン病患者の食事満足度に関連する要因を属性要因、疾患要因、治療要因、及び行動要因から明らかにすることを目的に、寛解期にあって自宅で生活する成人クローン病患者115名を対象に質問紙調査を実施した。回答のあった37名のデータを分析した結果、クローン病活動度が低いほど、また主観的重症度が低いほど食事の量的満足度が高く、同居家族があり、栄養剤からの摂取カロリーが少ないほど、また試し体験行動の頻度が多いほど食事の質的満足度が高いことが明らかになった。さらに、1日の食事回数が多いほど食事の量的、質的満足度が高かった。
35.地域高齢者におけるセルフ・メイドによる口腔ケアプログラムの開発	共	2011年12月1日	第31回日本看護科学学会学術集会(於高知文化プラザかるぽーと)	高齢者がセルフ・メイドできる機能的口腔ケアプログラム案を開発し、その効果を検証することを目的とした。高齢者21名を無作為に介入群9名と対照群12名に分け、介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で嚥下機能、発話機能、呼吸機能を測定し比較した。その結果、介入群において呼吸機能の一つである最大吸気保持時間が1ヵ月後、2ヵ月後で有意に延長する効果が示された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、熊澤友紀、百瀬由美子、布谷麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり、米田雅彦
36.周術期患者に対する寝衣交換の技術の教育効果	共	2011年8月1日	第37回日本看護研究学会学術集会(於パシフィコ横浜)	成人看護学外科系実習において、術後疼痛があり輸液中の患者に対する寝衣交換の技術向上を図るために、実習初日に学内演習を実施するとともに、学生による自己評価及び教員等による他者評価を導入し、その効果を学生の自己評価の結果から検討した。学修達成度が「非常に・大体当てはまる」と自己評価した割合が75％以上の項目は、学内演習では9項目、術後患者に初めて寝衣交換を実施した際では0項目、実習終了時では19項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。 共同発表者：熊澤友紀、深田順子、吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい
37.クローン病患者の食事満足度に関連する要因の分析	共	2010年12月1日	第30回日本看護科学学会学術集会(於札幌コンベンションセンター)	クローン病患者の食事満足度に関連する要因を属性要因、疾患要因、治療要因、及び行動要因から明らかにすることを目的に、寛解期にあって自宅で生活する成人クローン病患者98名を対象に質問紙調査を実施した。回答のあった22名のデータを分析した結果、クローン病活動度が低いほど、また主観的重症度が低いほど食事の量的満足度が高いことが明らかになった。さらに、試し体験行動の頻度が多いほど食事の量的、質的満足度が高かった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい、深田順子、熊澤友紀
38.看護学実習における周術期患者へのフィジカルアセスメント技術教育の効果	共	2010年12月1日	第30回日本看護科学学会学術集会(於札幌コンベンションセンター)	成人看護学実習において周術期患者に対するフィジカル・アセスメント能力が向上することを目的に、学生自身による評価と教員または病棟スタッフによる他者評価のフィードバックを行い、その教育効果を検討した。3年次生80名を対象とした結果、実習前、中、後で自己評価、他者評価ともに達成度の高い項目が8項目から9項目、最終的に24項目となり、この教育方法はフィジカル・アセスメント能力を向上させる可能性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。 共同発表者：熊澤友紀、深田順子、吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい
39.地域高齢者における保健行動に関連した自己制御尺度の妥当	共	2010年12月1日	第30回日本看護科学学会学術集会(於札幌コンベンショ	地域高齢者の保健行動に対する自己制御力をアセスメントする尺度の妥当性と信頼性を検討するために、高齢者20名を対象に口腔ケアプログラムを1カ月間実施し、実施前後に自己制御尺度を用いて調査

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
性と信頼性の検討			ンセンター）	を行った。結果、口腔ケアに関してセルフチェックができる高齢者は、自己制御尺度の合計得点が高いことから、自己制御尺度は自己制御の強度を示すうえで、10％の有意水準内での妥当性が示唆された。また、コンプライアンス、定期検診以外の保健行動については再テスト法による信頼性が確認された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、百瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、熊澤友紀、横矢ゆかり、坂上貴之
40.地域高齢者における器質的口腔ケアプログラムの効果	共	2010年9月1日	第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会（於新潟コンベンションセンター）	高齢者の誤嚥性肺炎予防を目指す器質的口腔ケアプログラム案を開発し、その効果を検証することを目的とした。高齢者20名を対象にプログラムを適用し、その効果を介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で磨き残しの程度、唾液量、唾液中に含まれる細菌量、および口臭を測定し比較した。結果、プログラムの実施前後で1日の歯磨き回数が有意に増加し、磨き残しの合計得点が有意に低下した。唾液量、唾液中に含まれる細菌量、および口臭には実施前後で有意な変化は認められなかった。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：鎌倉やよい、深田順子、熊澤友紀、百瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、横矢ゆかり、米田雅彦
41.地域高齢者におけるセルフ・メイドの機能的口腔ケアプログラムの効果	共	2010年9月1日	第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会（於新潟コンベンションセンター）	高齢者がセルフ・メイドできる機能的口腔ケアプログラム案を開発し、その効果を検証することを目的とした。高齢者21名を無作為に介入群9名と対照群12名に分け、介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で嚥下機能、発話機能、呼吸機能を測定し比較した。その結果、介入群において呼吸機能の一つである最大吸気保持時間が1ヵ月後、2ヵ月後で有意に延長する効果が示された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、熊澤友紀、百瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、横矢ゆかり、米田雅彦
42.PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者における口腔保健尺度の開発	共	2009年9月1日	第14回日本老年看護学会学術集会(於札幌コンベンションセンター)	高齢者が自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階として高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにするために行ったフォーカス・グループ・インタビューの結果から7要因41項目からなる口腔保健行動尺度を開発し、高齢者及び40歳以上の同居家族の計1883名に質問紙調査を行った。回収された951名のデータを分析した結果、最終的に6要因25項目の尺度となった。 本人担当部分：データ収集を担当。 共同発表者：深田順子、百瀬由美子、鎌倉やよい、吹田（布谷）麻耶、森本紗磨美、藤野あゆみ、横矢ゆかり、坂上貴之
43.クローン病者がウェブ闘病記を書くことの意味	単	2009年8月1日	第14回日本難病看護学会学術集会（於前橋テルサ）	クローン病者にとってウェブ闘病記を書くことの意味を探求することを目的に、162件のサイトを対象に、開設者の属性、開設動向及び付加機能の利用状況、開設動機、形式と記述内容の4点について分析した。結果、開設者は30歳代の男性が多く、開設動機は「社会貢献」と同病者との「コミュニティの形成」が多かった。内容は、日々の自分の体調を書いたものが7割であった。以上より、ウェブ闘病記は病者にとって「健康状態のモニタリングツール」と「同病者との交流の場」として意味づけられていた。
44.地域高齢者の口腔保健行動－PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた類型化－	共	2009年8月	第35回日本看護研究学会学術集会（於パシフィコ横浜）	高齢者が主体的・自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階として高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにすることを目的にシニアクラブに所属する高齢者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。得られたデータをPRECEDEモデルを基に分類と抽象化を行い、介入の視点を検討した。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析、結果のまとめまでを担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、百瀬由美子、深田順子、森本紗磨美、横矢ゆかり、藤野あゆみ、鎌倉やよい
45.クローン病者の看護研究の動向	共	2007年7月	第12回日本難病看護学会学術集会（於青森県立保健	クローン病者への看護の概況を明らかにすることを目的に、1983－2005年に発表されたクローン病者の看護に関する原著論文77件を対象に、研究方法と内容について分析した。結果、入院中の1事例を対

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
			大学）	象とし、行った看護を振り返るかたちでの事例研究が大半であった。今後、事例研究を積み重ねるとともに、病者に共通した生活体験を知る視点、入院中だけでなく退院後の生活を含めた看護、ケアの有効性を科学的に検証する研究などの必要性が示唆された。 本人担当部分：データの分析を担当。 共同発表者：荒木しのぶ、吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
46.クローン病者の食事を通じた他者との関わりの体験	共	2007年7月	第12回日本難病看護学会学術集会（於青森県立保健大学）	クローン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クローン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
47.在宅栄養法の普及に関する看護師の意識調査	共	2003年2月	第25回在宅経腸栄養研究会第17回在宅静脈栄養研究会合同集会（於パシフィコ横浜）	在宅栄養法に関する臨床の看護師の意識を明らかにするために、無作為抽出した関西地区の18施設に勤務する看護師579名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、前回のA大学病院に勤務する看護師に行った調査結果と同様、栄養管理チームの認知度が低く、チーム医療が浸透していなこと、在宅栄養法において看護師が患者へのケアとして現状でできることと認識している役割との間にギャップがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、高木洋治
48.わが国の在宅栄養法の普及に関する要因について	共	2001年12月	第12回日本在宅医療研究会学術集会（於大阪大学コンベンションセンター）	本邦において、欧米諸国に比べ在宅栄養法の普及が進んでいない要因が医療者、特に看護師に存在しているか否かを明らかにする目的で、A大学病院に勤務する看護師469名に質問紙調査を実施した。結果、要因として、栄養管理チームの認知度が低く、チーム医療が浸透していなこと、在宅栄養法において看護師がケアとして現状でできることと認識している役割との間にギャップがあり、患者・家族に十分なケアが提供されず、彼らが在宅療養を受け入れることを困難にしている恐れがあること、の2点が考えられた。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、福田祥子、高木洋治
３．総説				
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.難病看護がつなぐ難病患者の多職種連携	単	2024年5月31日	第65回日本神経学会学術大会　シンポジウム	「真の多職種連携－難病支援学術コンソーシアムの役割を考える」と題するシンポジウムにおいて、消化器難病（炎症性腸疾患）患者に看護師、研究者としてかかわるなかで学んだこと、多職種連携における看護の専門性について、講演と意見交換を行った。
2.炎症性腸疾患領域における Shared Decision Making	単	2022年7月3日	第2回大腸実践内視鏡研究会（於東京ミッドタウン・ウエスト2階会議室 ハイブリッド開催）	炎症性腸疾患の治療に用いられる薬剤の多様化に伴い、SDMの実践がますます求められるようになっている。患者および医療者の治療法の意思決定に関する国内外の研究動向をふまえ、治療選択を支援するためのツール開発のプロセスと、実際に開発し臨床で活用しているツールについて紹介した。
3.IBDチーム医療における 看護師の役割	単	2022年3月12日	第2回IBD Support Seminar （於 神戸三宮東急REIホテル）	教育講演の講師として、IBDにおけるチーム医療の必要性、IBDにおいてチーム医療を促進するには、IBDチーム医療における看護師の役割の3点について講演を行った。
4.学術用語の定義付けが看護実践にもたらす意味－セルフケア概念に着目して	共	2021年12月4日	第41回日本看護科学学会学術集会	日本看護科学学会学術用語検討委員会では、2011年に「看護学を構成する重要な用語集」で100語を特定し、2013年には「看護学学術用語の検討を統括するシステム」の構築を提唱してきた。第15期委員会ではこのシステムを実装する試みで、これまで定義された用語の

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
				中から時代とともに再検討を要する概念を抽出し、実践現場で看護職が活用できる、新たな定義付けを検討した。 共同発表者：大村佳代子、布谷麻耶、田中晴佳、和住淑子、小野博史、瀬戸奈津子、長江弘子、安酸史子
5.IBD領域におけるSDMの研究動向	単	2021年7月30日	IBDにおけるSDM（於ホテルオークラ神戸 ハイブリッド開催）	IBDの治療に用いられる選択薬剤の増加に伴い、SDMの実践がますます求められるようになっている。IBD患者および医療者の治療法の意思決定に関する国内外の研究動向をふまえ、現在、取り組んでいる治療選択を支援するディシジョン・エイドの開発プロセスについて紹介した。
6.IBD領域におけるSDM－看護師に求められる役割－	単	2020年1月26日	IBD shared decision makingの実践（於田辺三菱製薬本社）	IBDの治療に用いられる選択薬剤の増加に伴い、SDMの実践がますます求められるようになっている。IBD患者および医療者の治療法の意思決定に関する国内外の研究動向について紹介し、そこからSDMを実践するうえで看護師に求められる役割について発表した。
7.IBD看護研究の重要性	単	2019年3月16日	IBD看護研究ワークショップ（於武田薬品工業株式会社グローバル本社）	IBD看護研究のわが国における現状と課題について、2000年以降の研究動向をもとに今後求められる看護研究について概説した。また、看護研究の最初のステップとしてクリニカルクエスチョンをいかにリサーチクエスチョンへ導くかについて講演し、その後、参加者同士で関心のあるテーマごとに分かれてグループディスカッションを行った。
8.IBD患者の治療法の意思決定：国内外における研究動向	単	2018年9月22日	第3回兵庫IBD Total Care Meeting（於ホテルオークラ神戸）	IBD患者の治療法の意思決定に関する国内外の研究動向と今後の課題を明らかにするために行った文献レビューの結果について発表した。
9.IBD看護の実践と研究－臨床と大学の看護師の協働を目指して－	単	2018年3月30日	IBDナースWorkshopに向けたAdvisory Board Meeting（於武田薬品大阪本社）	クローン病患者を対象にこれまで取り組んできた研究の概要について紹介し、炎症性腸疾患患者への看護を考えていくうえで臨床の看護師と大学の看護師がどのように協働できるのかについてディスカッションを行った。
10.患者さんも悩んでいます。IBD治療選択の実際と看護師の役割	単	2017年11月	第7回神戸ハーバー実践GIセミナー（於ラ・スイート神戸）	炎症性腸疾患の治療選択におけるShared Decision Makingの研究動向について、またこれまでに行った患者および看護師への面接調査結果をもとに、炎症性腸疾患患者の生物学的治療選択の実際と患者の治療選択に際しての看護師の関与と求められる役割について発表した。
11.第34回日本看護科学学会学術集会シンポジウムⅠ実践の課題を研究へ－看護ケアプログラムの開発	共	2014年11月	第34回日本看護科学学会学術集会（於名古屋国際会議場）	看護ケアプログラムの開発についてのシンポジウムにおいて、これまでに行ったクローン病患者への食事の自己記録を活用した食事支援プログラムの開発とその効果の検証結果について紹介するとともに、看護ケアプログラムを開発するにあたって、患者の行動変容を促し、それを持続させるための仕組みをどのように組み込むかについて参加者と共に討論を行った。 本人担当部分：シンポジストを担当
６．研究費の取得状況				
1.診断後間もない成人期クローン病患者へのセルフケア支援アプリの開発と検証	共	2024年4月1日～2028年3月予定	学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）	分担者
2.炎症性腸疾患患者の病状と身体活動量の関連－生活習慣病に着目した患者・家族支援－	共	2024年4月1日～2025年3月予定	学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）	分担者
3.大腸内視鏡検査を受ける炎症性腸疾患患者の苦痛軽減に向けた支援モデルの開発	共	2022年4月1日～2026年3月予定	学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）	代表者
4.潰瘍性大腸炎患者の疾病に伴う負荷を測定するツールの開発	共	2022年4月1日2027年3月予定	学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）	分担者
5.クローン病患者のセルフケアの再構築を	共	2020年4月～2024年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究	分担者

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
促進させる看護アセスメントツールの開発			（C））	
6.クローン病患者の生物学的治療選択を支援するディシジョン・エイドの開発	共	2018年4月～2022年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））	代表者
7.炎症性腸疾患患者へのe-ポートフォリオを用いたセルフケア支援プログラムの開発	共	2015年4月～2019年3月	学術研究助成基金助成金（挑戦的萌芽研究）	分担者
8.炎症性腸疾患患者の治療法に関する意思決定支援モデルの構築	単	2015年4月～2018年3月	学術研究助成基金助成金（若手研究（B））	代表者
9.壮年期の進行期婦人科がん患者の配偶者が体験する支援ニーズに基づくケアモデルの構築	共	2013年4月～2016年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））	分担者
10.寛解と再発を繰り返す婦人科がん患者の家族の心理的プロセス―遺族への面接調査の分析から―	共	2012年～2014年	天理医療大学学内研究助成	分担者
11.クローン病患者への行動分析学的アプローチに基づく食事指導プログラムの開発と検証	単	2011年4月～2015年3月	学術研究助成基金助成金（若手研究（B））	代表者
12.クローン病患者への食事栄養指導プログラムの開発と有効性の検証	単	2009年4月～2011年3月	学術研究助成基金助成金（研究活動スタート支援）	代表者
13.医療・教育現場で真に役立つ自己制御尺度の開発と応用	共	2008年4月～2011年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究（B））	分担者
14.クローン病者の食生活体験のプロセスに関する研究	単	2007年	公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金	代表者

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2023年6月10日～現在	日本難病看護学会難病看護師認定委員会実行委員
2.2023年6月～現在	日本難病看護学会理事
3.2023年3月16日2023年11月12日	第28回日本在宅ケア学会学術集会運営委員
4.2021年9月～現在	日本難病看護学会編集委員会委員
5.2021年2月～現在	日本難病看護学会代議員
6.2020年7月～現在	日本慢性看護学会編集委員会委員
7.2019年10月1日～現在	日本看護科学学会　和文誌専任査読委員
8.2019年7月11日～2021年3月31日	日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会委員
9.2018年4月～現在	IBD Support Seminar世話人
10.2016年4月～2021年3月	兵庫県看護協会　兵庫県ナースセンター再就業支援研修　講師